

シモン・ヴェーエ《キリストの神殿奉献》の視覚的着想源とその役割

伊藤里華(日本大学大学院修了)

シモン・ヴェーエ(1590-1649)は17世紀フランスの画家であり、1627年から1640年まで国王首席画家を務めていた。本発表では、ヴェーエの《キリストの神殿奉献》(1640、ルーヴル美術館)を分析対象とする。本作品はパリのサン・タントワヌ通りに位置するサン・ルイ聖堂(現在のサン・ポール・サン・ルイ聖堂)の主祭壇に掛けられていた。サン・ルイ聖堂はルイ13世によって献堂され、複製版画の銘文から本作品の注文はリシュリュー枢機卿が行ったことが明らかになっている。

代表的な研究としては、本作品に関する最も早い記述であり、また描かれた建築物についての学識の高さに注目したC.ル・カルパンティエの画家伝記集の記述(1821)、本作品に関する史料を整理したJ.テュリエの展覧会カタログ(1990)、主題の選択理由について王太子の誕生と結び付ける解釈を提示したB.ゲートゲンスの論文(2009)がある。

しかし先行研究では、画家が参照した可能性のある美術、あるいは建築上の作例については論じられてこなかった。本発表では、先ず、視覚的着想源となった版画を提示する。次に、ヴェーエが画中に描きこんだ建築物について考察し、同時代の画家の作例との比較から、本作品についての新たな解釈を提示する。

本作品の背景に描かれた凱旋門の浮き彫り部分には出エジプト記(25:31-39)に記述されている、モーセが幕屋に作らせた祭具の一つである〈メノラ〉と呼ばれる燭台が描き込まれている。〈メノラ〉の側には〈台車〉〈青銅の海〉〈青銅の柱〉といった、列王記上(7:13-51)で記述される、ソロモンがヒラムに制作させたソロモンの神殿の備品が描かれている。発表者は、この浮き彫り装飾部分の視覚的着想源として1565年にリヨンで刊行された挿絵入り聖書『解釈と理解のためのフランス語八行詩つき挿絵入り聖書』*Figvres de la Bible*…の版画が引用された可能性が高いことを指摘する。

しかし、これらの図像は「キリストの神殿奉献」(ルカによる福音書2:22-38)がエルサレムで行われたという新約聖書の記述を忠実に示すのみではないと考えられる。エルサレム、凱旋門、メノラといったモチーフの組み合わせは、ローマのフォロ・ロマーノに現存する「ティトゥスの凱旋門」と共通点を持っている。先行研究においてニコラ・プッサン(1594-1665)やジャック・ステラ(1596-1657)といった同時代画家らによって描かれた、ローマ皇帝ティトゥス(39-81)を主題とする作品は、紀元後70年のティトゥスによるエルサレム包囲戦における勝利と、リシュリュー枢機卿とルイ13世によるラ・ロシェル包囲戦における勝利を重ね合わせて讃えるために制作されたことが指摘されてきた。

ヴェーエは本作品の制作にあたり、挿絵入り聖書を参照しエルサレムの神殿を示す祭具を描き入れることでデコールムに即した作品に仕上げると同時に、献堂者であるルイ13世と作品の注文主であるリシュリュー枢機卿への賛美を巧みに取り入れていたと考えられる。